



学校だより

「みんな花笑み」

- 「知」 主体的に考え粘り強く取り組む子を育てます。
「徳」 自分を大切にし、互いの違いを認め合える子を育てます。
「体」 心身ともにたくましく生きていく子を育てます。
「公」 まちを愛し、人とつながり、ともに創造する子を育てます。
「関」 広い視野をもち、自分の思いをのびのびと表現する子を育てます。

令和5年9月30日

横浜市立菅田の丘小学校

校長 若山 京子

10月号

[神無月 October]

モチベーションとウェルビーイング

副校長 白井 亮司

今、学校では、学年競技・演技の練習以外にも、運動会に向けた様々な取組が進んでいます。開会式・閉会式代表児童の朝礼台に立つ凛々しい姿、リレーでタイミングよくバトンパスができるよう声をかけあう姿、みんなの士気を高められるよう腹の底から声を出す応援団、各々がよりよい運動会となるよう工夫し取り組む5・6年生の係活動……。どの取組も、子どもたちの真剣な表情が本当に素晴らしく、運動会当日が本当に楽しみです。自分で選んだものだからこそ、真剣に取り組み、よりよく自分の役割を果たそう、運動会をよりよいものにしようとモチベーションを高くもち、取り組んでいるのだと思います。

教育心理学者である鹿毛雅治さんは、著書「モチベーションの心理学」(中央公論新社)で次のように書かれています。

「達成はウェルビーイング(身体的、精神的、社会的に良好な状態)の構成要素のひとつとしても位置付けられている」

「『為せば成る』という体験それ自体を過去にどれだけ積み重ねているかが、当人の将来のやる気を左右する」

運動会の他にも、宿泊等の行事、学年の実行委員等、学校には自分で選び活動する場面が多くあります。その役割を果たした子どもたちの表情は、自信や達成感に溢れています。自分の役割を果たそうと努力を重ねたこと、その結果として得られたプラスの感情は、ポジティブな経験として、その子の今の幸せを高めたり、将来のやる気につながっていたりするはずです。

鹿毛さんは次のようにも書かれています。

「思いやり目標とは他者の福利を高めようとする目標を指す。その基盤は『エコ・システム』だという。エコ・システムとは、他者の欲求を満たすことは自分の欲求を満たすことでもあり、そのことが全体の幸福にもつながる。そこでは、他者と共同してポジティブな成果が得られたり、他者の欲求を考慮したりする場が重視される」

正に運動会や宿泊等の行事は、自分自身のために努力するだけではなく、共通の目標に向かったりお互いの思いを大切にしたりし、共同して一つのものを創り上げるエコ・システムではないでしょうか。みんなで協力し合ったからこそ得られる大きな達成感・満足感は、ポジティブな経験として、子どもたちの心に刻まれると思います。

子どもたちが「今」そして「将来」、「自分自身」そして「関わる人たち」の「ウェルビーイング」を高めるために、モチベーションを高くもつことができるよう、教育活動を工夫していきたいと考えます。

また鹿毛さんは次のようなことも書かれています。

「意志力は筋力と同様に、使うと疲労する」「意志力は筋力と同様に、休ませれば復活する」

子どもたちは、がんばってエネルギーを使い果たしてしまうことやうまくいかずに自信を無くしてしまうこと、自分の気持ちを押しえられないこともあります。そんな時、子どもの気持ちを聞かずに「もう少しがんばれ」「あなたならできる」などと励ましたり、頭ごなしに叱ったりすることがあるのではないのでしょうか。子どもは自分を振り返ったり、自分と向き合ったりすることで、自分から次の行動を起こす力をもっています。子どもの素直な気持ちを受け止め、エネルギーが満ちるのを待つような温かな関わりをしていくことも、わたしたち大人の大切な役割ではないかと思えます。